

「ザグレブの住宅」Zagreb, Croatia

設計=エドワルド・ソウト・デ・モウラ

ザグレブの住宅について エドワルド・ソウト・デ・モウラ

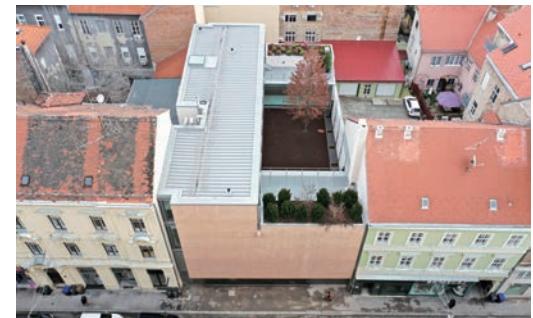
参照 | 本誌pp.22-41

ザグレブの一世帯用住宅。このプロジェクトでは、堅牢な街並みに存在している空隙を、都市と一貫性のある方法で埋める措置を講じねばならなかった。住宅は3つのボリュームに分配される。それらはU字形の建物を生み出し、2ヶ所の屋外空間が付随する。住宅の私的な部分と接する庭は、住人の親密さを尊重する。もう1つは裏庭で、近隣の建物とのフィルターの役目を果たす。道路に沿った立体的な構成が重視され、立面のスケールと使われた素材を生かして、近隣の新古典主義建築のファサードとの連結が模索された。1階はガラス壁とされ、構造的な支

柱はない。道路と都市に向けて開かれている。ファサードの左側の開口部は消防用の進入口にもなり、隣の建物との連結部として機能する。

住宅は4階建てである。1階には道路からのエントランスが2つある。廊下に向かう家族用出入口と、裏手にあるガレージに向かう自家用車用出入口である。2階はプール下部の機械室となる。部屋——リビング、キッチン、プール、サウナ、水廻り——は3階に配置され、すべて庭に面している。庭の南側境界に接する部分には、空気の流れを良くし、ガレージへの車路を明るくするために切込みが入れられている。庭の北側の部分には、屋根つきの屋外エリアがある。設備の整った3つの寝室と2つのテラスが最上階を占める。そこでは植物によってプライバシーが保護されている。

建設には混構造が採用された。2つのボリュームは鉄筋コンクリート造で、3つめは鉄骨造である。



道路側上方より見る

鉄筋コンクリート構造と特に2階のクロス・ビームにより、西側のファサードは垂直支柱から解放され、道路に面したギャラリーの透明性を高めている。東と西のファサードは着色コンクリート造で、小槌で叩いて仕上げられた。他の立面にはステールの窓枠が嵌められ、必要な箇所にはヴェネツィアン・ブラインドが着けられた。1階の床は天然



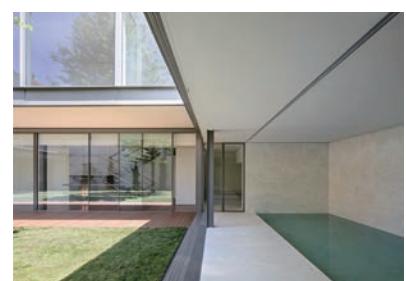
道路側ファサード



前面道路に開いたギャラリー



3階の庭を見下ろす



右にプール、左に庭を見る



裏庭とガレージの境界エリア



裏庭



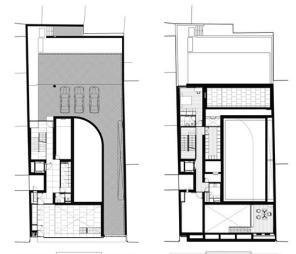
ガレージ



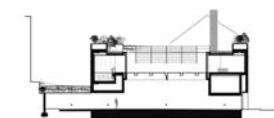
3階通路

石が、3階の高さにある庭園には土が敷かれ、その軒下側は板張りの通路になっている。機械設備室と水廻りは大理石の床であるが、それ以外の部屋はアフゼリアの板張りとした。

作品:ザグレブの住宅 | 設計:エドゥアルド・ソウト・デ・モウラ
コーディネート:Luisa Moura, Daniel de Castro
協働者:André Cardoso, Afonso Romana, Rute Peixoto, Tânia Castro, José Maria Gonçalves Vieira, Carla Lourenço, André Tavares, Luis Peixoto, José Carlos Mariano
ローカル・アーキテクト:3 LHD | 構造:Afaconsult, Palijan d.o.o.
機械設備:Afaconsult, TERMOTEHNIKA PAUN d.o.o.
電気設備:Agenor plus d.o.o.
防火設備:INSPEKTING d.o.o., APIN projekt d.o.o.
スケジュール:設計2014-17年/竣工2021年
所在地:Zagreb, Croatia



各階平面図



断面図

「東京の住宅」Tokyo, Japan

設計:畠森泰行

東京の極小住宅 フランチェスカ・セッラザネッティ

参照 | 本誌 pp.42-47

日本人建築家の多くと同じく、畠森泰行(1979年、岡山県生まれ)にとって、狭小な敷地に一世帯用住宅を設計するという挑戦はまったく目新しいものではない。彼の事務所が実現した最初のプロジェクト(2010年の目黒の住宅)では、

わずか17m²の建築面積に地下1階と地上4階が展開する。今回取り上げる新作では、接地面積が26m²に増え、その約2倍の広さをもつ敷地の境界からセットバックしている。建物が密集する東京の街並に嵌め込まれたこの住宅は、狭い面積を生かして空間の潜在力を最大限に引き出した。設計案は、分解と拡張による空間の戯れである。ただし、空間の分節化と解体は一方向にのみ作用するのではなく、中央のコアの周りを回転し、遠心力をつけて拡散するよう見える。

このような設計案は、箱を1つずつ積み重ね、ヴォリュー



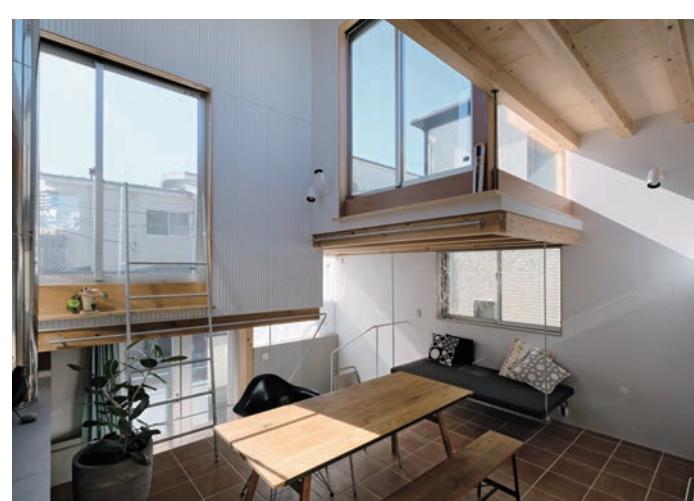
南東側全景



エントランス廻り



ダイニング・エリア



ダイニング・エリア:多様な断面構成



エントランスよりダイニング・エリアを見通す

人の道程において重要な一步だったことは言うまでもない。特に、ファンズワース邸(1945-50)からベルリンの新国立美術館(1962-68)への移行における、注目すべき結節点と見なせよう。

現に、ミース・ファン・デル・ローエはこの時初めて、直交グリッド構造の屋根スラブを、隅部から距離を取りつつ外縁に沿って点状に配置した支持体で支える解を、16分の1模型で実験した。その後、別の4つのプロジェクトにおいてモニュメンタルな大スケールで再登場することになる。すなわち、シカゴのコンベンション・ホール(1953)、サンティアゴ(キューバ)のバカルディ・ビル(1957)、1960年のゲオルク・シェーファー美術館プロポーザル案、そして最後がベルリンの国立美術館である。

屋根と完全に透明な周壁とを分離し、ヴォリュームを構造的に単一スパンまで縮小することは、明らかに設計上のラディカルな選択を意味し、生活空間の造形に適用されたという点でより一層野心的な挑戦となった。ミースは、使用者の多様な類型を考慮して多様な平面スキームを考案した。彼は理想的な設定を追求するのではなく、可能性のあるすべての選択肢を探ったのである。公に発表するために選ばれた平面図では、中心からずらしたコンパクトなサービス・コア(キッチン、2つの浴室、洗濯室、小さな暖炉)の周りに、広いリビング・エリアと2つの夜のゾーンが配置されている。規模は40×40フィートから60×60フィートの振幅を許容し、単身者が住むのか、一家族用かによって変わる。プライバシーを保証するのは、軽量パーティションとカーテンのみである。構造と建設方法を精査した解も多岐にわたる。選り抜きの解は、二重にテンションをかけた堅牢な屋根を、各辺の真ん中にH形鋼の柱を計4本建てて支えるものであった。ただしミースは、膨大なスケッチの中から長方形平面を取りあげ、スチールの梁を單一方向に架けた屋根スラブ、向き合う2つのファサードのみ2本1組の支柱を使い、屋根の表面に2本の桁を渡して屋根スラブを吊り下げる建物本体とコントラストを出すデザインも検討している。さらに、構造的グリッドを45度回転させ、隅部に支柱を置く仮説もあった。これは優れた静力学的作用を保証したが、美的な次元で納得できるデザインではなかった。

カット ベンド フォールド ブレイ
「切る、曲げる、折り畳む、遊ぶ」Chennai, India

設計=マタロー・アソシエイツ

鉄筋コンクリートの単板から

建てられたヴァーストウ住宅

トリシャ・パテル

参照 | 本誌pp.56-65

これから紹介するのは、あるビジネスマンとその家族——妻と3人の子供——のために実現された住宅で、建物が密集するチェンナイ中心部の敷地を占めている(チェンナイはかつてマドラスと呼ばれた都市で、現在の人口は450万人以上を数える)。敷地は四面が閉じており、南西の隅部のみ道路と接している。三方を隣家に囲まれ、長辺は高層集合住宅と接しているこの敷地は、建物を新築するにあたり、プライバシー保護に劣らず重要な、日照と通風を確保するうえでの問題を抱えていた。

その他にも、このプロジェクトは「ヴァーストウ」と呼ばれる、どうすれば建築が調和ある生活の実現に寄与できるかを定めた、ベーダの教えの遵守という問題に直面す

ることになった。インドの建築伝統から生まれたこれらの規則は神話的な起源をもっており、立地環境に即した論理的・合理的な方法で建物の平面構成をどう選ぶかを定めている。これにより建物の構成要素の枢要地点について、特にエントランス、寝室、キッチンからベッドの置き方と寝る時の方角まで、具体的な位置が決められるのである。

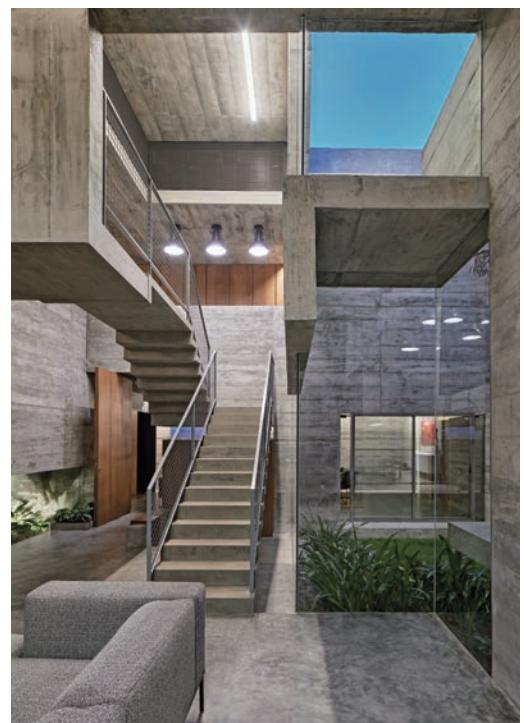
敷地いっぱいに建設してもよい現行の建築法規を生かして、住宅の三面の外壁は敷地境界まで延ばされた。鉄筋コンクリートの平板が屋内を屋外から守るカプセルとなって、ヴォリュームの外殻を形づくる。その中に入ったとたん、RC板は折り畳まれて、中央の空隙を現前させる。

インドの伝統的な中庭を模範として、大きなヴォイドが建物の内側に削り抜かれ、採光と通気を保証し、緑地が設けられた。そのうち最も広い中庭が住宅の中央を占め、1階の室内に隈なく延伸していく。こうして共有の空間と最も私的な部屋を分離しつつ連結し、それと同時に家族生活の中心が構築されるのである。

最も私的な空間は上階に置かれ、各々が小さな中庭に面している。住宅の規模を調整するため、中庭の周囲



中庭より室内を見る



リビング・エリアより階段室を見る

う考えられた。中庭に建てられた住宅パヴィリオンは、分節化されて流動的な、彫塑的なヴォリュームで構成され、鉄筋コンクリートの大きな間仕切壁で地上から持ち上げられている。欠けた煉瓦を並べた「鱗」の仕上げが、建物に強烈な物質的性質を与えている。

作品:アトリエ・フローリスト

設計:エラスティコ・ファーム —— Stefano Pujatti

協働者:Corrado Curti, Manuela Luis y Garcia,

Davide Musmeci, Valeria Brero, Daniele Almondo

現場監理:Stefano Pujatti

構造エンジニア:Carlo Marocco

設備設計:Luciano Ghia | 構造:Corrado Curti

安全コーディネート:Carlo Marocco

現場監理:Stefano Pujatti

施工:Gorgone Rosazza srl

建築主:Idea Fiori di Marco Segantin

規模:延床面積 店舗・ショールーム=580 m²、住宅=150 m²

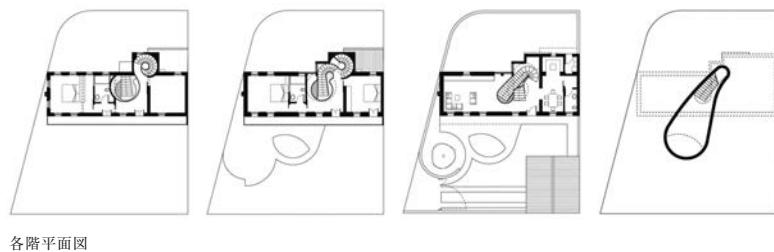
スケジュール:着工 2006年/竣工 2008年

所在地:Chieri (Torino), Italy

「トップガン」 Polcenigo, Italy

設計:エラスティコ・ファーム

参考 | 本誌 pp.76-77



各階平面図

ボルデノーネ農村部の小さな集落にあるデュープレックス式住宅は、地上2階とアティック階から構成され、バルコニーが付属している。この住宅は近隣のアヴィアーノ基地に勤務するアメリカ空軍パイロットの宿舎になった。もとの建物に加えられた無駄な増築部分を取り去ることにより、新しい動線空間が住宅の核となり、地下から屋根まですべてのスラブを貫いて「コア・ボーリング」のように穿たれたヴォイドの中を、ダイナミックに伸びていく。まるで居住空間の密度と関わり続ける、ヴォイドの力を隠喩的に称賛するようだ。階段の官能的なフォルムは、スタイルの手摺のフォルム、ディテール、動きを通して空間全体を活性化する作用によって強調されている。スラブを特徴づけるのは、開口部と特異な肌理が交互に現れる表層の強烈な異種混交性である。これらは、ナイロンの大きな布を敷き、大きさの異なるポリスチレン製の半球をいくつかランダムに置いてからコンクリートを打設して作られた。地面を掘って光を

採り入れたが、その縦穴は地下階と屋外に姿を現す。住宅の外観は単純で統一されており、伝統的な建築タイプロジーに従って復元された木製のバルコニーが目を引く。

作品:トップガン

設計:エラスティコ・ファーム——

Stefano Pujatti, Alberto Del Maschio

協働者:Alex Morassut, Davide Musmeci, Marco Buriana,

Roberto Marcuzzo, Manuela Luis y Garcia, Corrado Curti

現場監理:Alberto Del Maschio

構造エンジニア:Stefano Santarossa

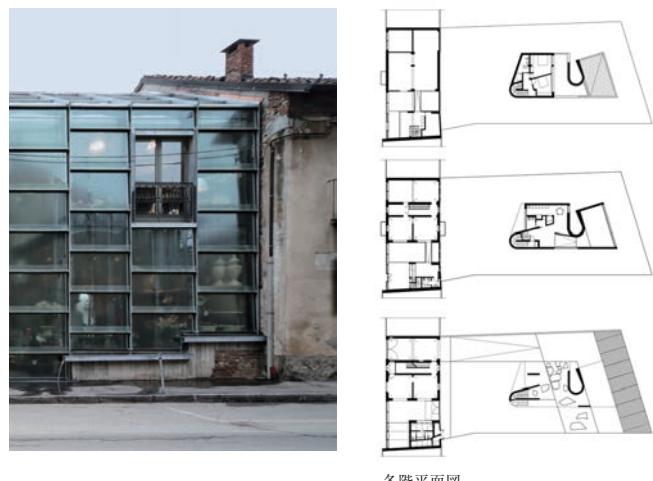
構造、安全コーディネート、現場監理:Alberto Del Maschio

施工:Luca Doimo Costruzioni

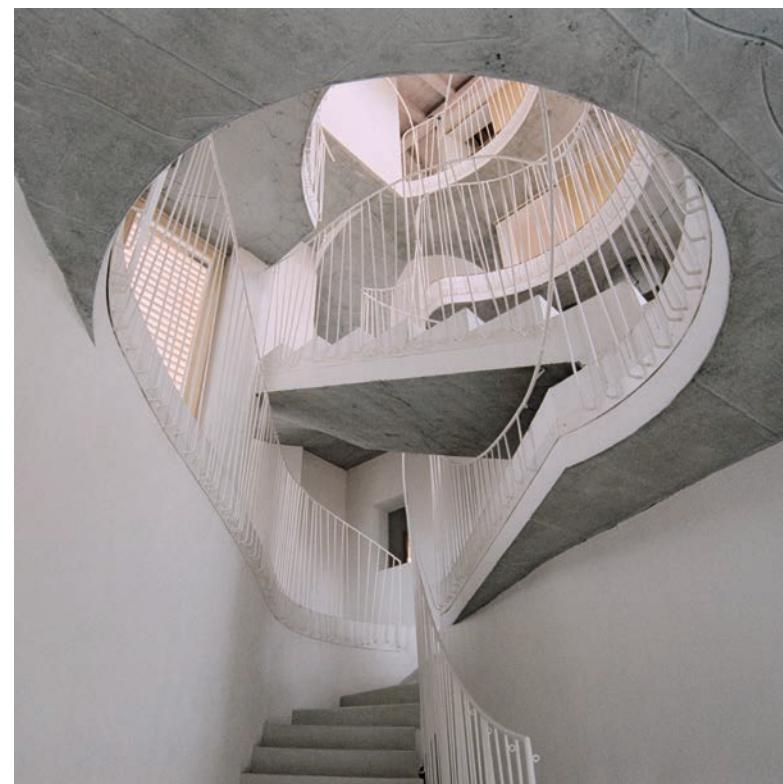
建築主:個人 | 規模:延床面積 270 m²

スケジュール:着工 2006年/竣工 2008年

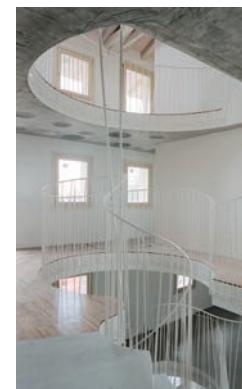
所在地:Polcenigo (Pordenone), Italy



各階平面図



外観



2階内部



住宅パヴィリオン



上方より見下ろす

階段室より見上げる

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2021 Arnoldo Mondadori Editore

©2021 Architects Studio Japan

CASABELLA JAPAN レクチャー

現代建築デザイン論 赤坂喜頭

第13.2回 反近代主義——建築と自然 |

2.風景と素材 [III-II]

[3]——ラ・トゥーレット修道院(1953-60)、ル・コルビュジエ:
SUBLIME
“崇高”的建築III]

前回は、ル・コルビュジエによって“崇高”的建築として出現したロンシャン礼拝堂を、改めて総合芸術の視点から再考しながら、ここからラ・トゥーレット修道院へ向かう創作思考の重要な源泉となっていた初期のサヴォワ邸を分析することで、この住宅に胚胎し、やがてラ・トゥーレットで強靭な造形として開花する、“対位法”的精神を読み取りました。この流れを受けて、今回はラ・トゥーレット修道院の具体的な空間構造に迫りたいと思います。

1:ラ・トゥーレット修道院の配置計画——

“C+I”型の平面構成

ラ・トゥーレット修道院の配置構成は、サヴォワ邸(1929-31)にて未発のまま潜勢していた“C+I”型の平面構成が、後にロンシャン礼拝堂(1950-55)において巧妙に有機的な変形がなされながらも、しだいに形を整え始め、ついにこの修道院において明確な構成として姿を現したものです。すでに本レクチャーで何度も述べたように、ラ・トゥーレット修道院の計画が、当時親交のあったアルヴァ・アルトによって世界に衝撃を与えた、“C+I”型構成のセイナツツアロ町役場(1952)の完成直後の1952年から始まることからも、ル・コルビュジエがこれに強い影響を受けたことは充分に考えられます。この型はその後、インドに建つチャンディガールの議事堂(1951-58)の平面構成へも再度

登場することになりました(前号:Fig.14)。この修道院において“C+I”型の平面構成が採用された根拠は、まず第1に、要求された主聖堂と修道院施設との複合建築という建築プログラムから、“祈り”的場と“生活”的場の機能分節を明確にするために、合理的であったことが挙げられます。その大きな基本型は、中世以来の伝統的な修道院において、すでに規範として決められていた平面構成を順守したものでした。“C+I”型の平面構成を特徴づけている矩形の中央中庭は、古来エジプトに起源をもつと言われる修道院が、“閉ざされた庭”と呼ばれてきた所以の、世間と隔絶して人里離れて暮らす隠者のための中心として、閉じた外部空間を象徴するものです。建築的な最古の形式として残されている記録は、820年にケルンの聖職者によってスイスのザンクト・ガレン修道院において描かれた仔牛皮の図面があり、これがその後に伝承されるべき正統的な基本型となりました。[Figs.1,2]

これは東西方向を主軸にしたバシリカ型の長堂式教会堂を中心にして、その南側に隣接して、中央に泉水盤をもつ十字形の通路を取り囲む、正方形の“回廊”が巡る閉じた中庭を配しています。そしてこれらの周囲には、礼拝堂、宿泊室、食堂、厨房、診療室、工房、学校などが、機能別に整然と平面的分散配置されるものでした。これは後の近代以降において、製造工程に合わせた機能別配置の平面構成をもつ、工場や研究所などの生産施設の原型となりました。ラ・トゥーレット修道院の設計にあたっては、クーチュリエ神父からル・コルビュジエに渡された回廊型の簡単なゾーニング・プランのスケッチも、この基本型に基づくものであり、また神父より強く参照を勧められ、ル・コルビュジエ自身も足を運び実測もした、プロヴァンス三姉妹のひとつと言われるル・トロネ修道院も、ドミニコ

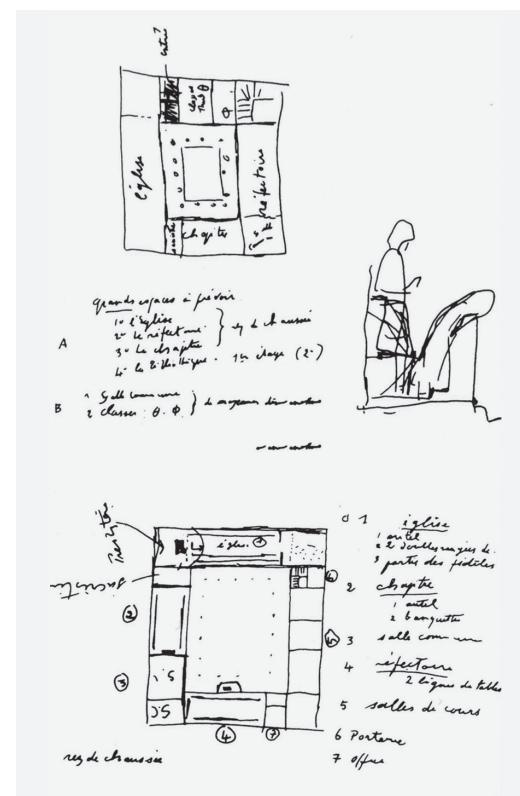


Fig.3:ラ・トゥーレット修道院 | クーチュリエ神父による基本ゾーニングとスケッチ

会とは異なるシテ派の施設として、この伝統的形式を継承していました。しかしル・トロネについては、本来は聖堂の南側の定められた“回廊”をあえて北側に配するなど、ロマネスク様式におけるザンクト・ガレン修道院の基本を守る正統的な聖ベルナルド平面から明らかに違犯したものであることから、ル・コルビュジエはこの平面計画をほとんど参照せず、正統的な配置計画へ戻しながら、しかし傾斜面の勾配を積極的に活用した巧妙な断面計画にのみ着目しました。そしてこれと対抗すべく、大地から浮いた十字形の空中“交叉廊”とも言うべきラ・トゥーレット修道院の大膽なアイデアを得たようです。また、これに加えてクーチュリエ神父からアドバイスされたゾーニングも無視するなど、野心的な無神論者であるル・コルビュジエは、計画当初から単独的で前例のない独自の解決法を新たに模索していました。このような経緯を経て、紀元前5世紀の古代ギリシアの都市プリエネの広場アゴラに由来をもち、アラートに触発されて、その開きながら閉じるル・コルビュジエ好みの両義性を自覚した“C+I”型の平面構成が決定されたと考えられます。[Figs.3,4]

敷地は、背後を鬱蒼とした森に囲まれて、東から西



Fig.1:セイナツツアロ町役場 |
アルヴァ・アルト、1952 | 平面図

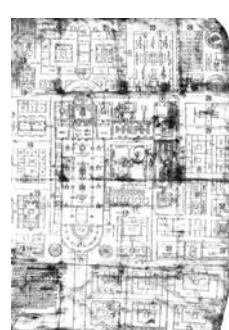


Fig.2:ザンクト・ガレン修道院 |
平面図

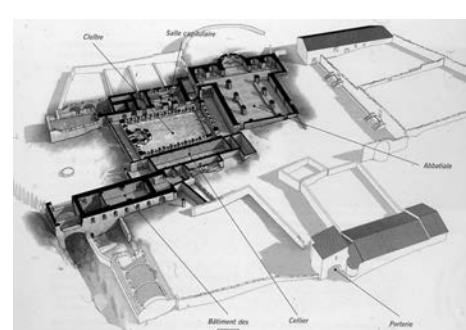


Fig.4:ル・トロネ修道院 | アクソノメトリック